

## 日本消化器外科学会雑誌編集後記

テレビのニュース番組を見ていると、教育現場における体罰の現状が頻繁に取り上げられています。ある高等学校ではクラブ活動の顧問による生徒への体罰が、生徒にとって最悪の結果を招いたといわれています。教育の一環であるとしても、教育者が行う肉体的な体罰は到底許されることではありませんが、過度に強く注意することによって精神的に過度なストレスを加えることもあってはならないことです。しかし、生徒の犯した重大な過ちに対して厳しく注意を促すことも必要です。教育者には生徒個々の性格を正確に把握し、的確な方法で対処することが求められています。

若手外科医の教育において、医療の安全性を確保するために、危険な行為に対しては指導者が厳しく注意をする必要があります。その場合、注意を受けた者が必要以上に過度のストレスを感じないように、うまくフォローすることが不可欠です。そのためには普段から同じ職場の同僚として十分に理解しあい、一人ひとりの性格を尊重して指導すべきです。このような不断の努力と気配りが欠けると、指導が効果的に行えないだけでなく、指導された者が過度にストレスを感じてしまい、「指導」ではなく「いじめ」を受けたと感じる可能性があります。古くからいわれているように、指導する者は後輩に対する愛情を持って指導し、指導される者は先輩に対して敬意を持って接することが、今こそ必要なのではないのでしょうか。

現在、多くの投稿論文を査読する機会を与えていただいています。本誌へ投稿された全ての論文は2名以上の編集委員によって査読されてから、編集委員会で他の編集委員の同意のもとに採択・不採択などの結論が出されています。編集委員会では投稿論文に対する結果について討議するだけでなく、論文投稿者に対して専門的にアドバイスをしたり、論文の書き方のアドバイスをしたりすることもあります。特に若い時期に先輩からいただくコメントは重要です。私自身の経験からも、本誌に投稿したときにいただいた厳しいアドバイスは、その後の医師としての考え方や研究の進め方に大きく役立ったと思います。「投稿論文の著者はどんな先生かな？」と思いながら、愛情を持って査読し、編集委員会で討議しておりますので、一人でも多くの若手消化器外科医の先生方に本誌に投稿していただくことを願っています。

(大辻 英吾)

2013年3月1日